フリードリヒ・ハイダー Friedrich Haider

とりわけ世界中の名歌手たちからの信頼の厚いマエストロ、9月、ウィーン国立歌劇場日本公演では《ロベルト・デヴリュー》を指揮

取材・文＝中東生
Text=Shinobu Naka

「私が指揮者になったのは、ウィーン・フィルのせいなのです」と笑う。

10歳の頃、合唱団としてウィーン国立歌劇場の《カルメン》の舞台に立ち、オケ・ピットから沸き上がってくる音色の素晴らしさに歌うのも忘れて立ち尽くしていたという。そんな彼が、ここ7年ほどウィーン歌劇場に客演を重ね、信頼関係を築き上げ、来日公演に同行する。

「《ロベルト・デヴリュー》はドニゼッティのオペラの中で最も興味深いものです。人間が精神的極限まで達した時、別の人格になるという究極の劇性が表現されている作品だからです。エリザベッタ個人の愛だけでなく、イギリス女王としての任務、そして愛人の名前を知りたいがためになされる取引などを表現するために、さまざまな色が要求されます。

私がこのオペラを初めて振ったのは、現在音楽監督を務めるオヴィエード・フィルとの演奏会形式でした。それから15年以上の間に60回弱にもなりますが、毎回飽きることなく、燃え上がるのを感じます。

このオペラは音楽的頂点が何度も重なっていき、最後のシーンにたどり着きます。そこでドニゼッティは、頭がドンドンと叩かれるような音を書いています。そしてロベルトの死刑が執行された瞬間、エリザベッタの頭の中は、人間の想像を越える死というものに支配され、正気を失っていくのです。

他のベルカントオペラと同様に、どんな小さなミスでも聴き逃してもらえない透明性が、オケの難しさです。この時代の作曲家たちは管弦楽的手法が上手ではないので、後の時代に出て来るような、シンボリックな色がオケにはなく、一種の伴奏に徹しつつ、言葉を持たないオケに、状況を音楽で表現させなければならないのです。

日本公演のキャストは、皆最高のベルカント歌手で、今日、モーツァルト歌手と同じくらい、集めるのが難しい人材です。ベルカントには発声の規則があり、それを完全に身につけていなければなりません。独特の強弱、呼吸法があり、その究極がメッサ・ディ・ヴォーチェです。1つの音に声を乗せ、息によって自在に強弱を操るこの唱法が出来る歌手は多くないのです。プロスはこれらの点で完璧なベルカントを体現してくれます。グルベローヴァにおいては、彼女の最高の役柄だと私は思います。

些細な部分にまで表現の可能性が無限にある役だからです。究極の心理ドラマは、音楽の中だけで表現が可能なので、演奏会形式の上演に向いています。

現在は指揮者の仕事で多忙ですが、指揮者は自分で音を出すことができないので、ピアニストに戻ると、ピアノという媒体を通して音楽が伝えられることが嬉しいです。グルベローヴァとは長い間共演してきましたので、プライヴェートでは終わってしまった関係も、音楽世界の中では普遍です。初めて会って、その2日後にはもう本番ということも珍しくない現代にあって、彼女のような芸術上のパートナーは貴重です。彼女の他にも、カサロヴァやスカンディウッツィとの共演が気に入っています。最近では、ティボー・コヴィッツ、フランツ・バルトロメイと組んだトリオで、ブラームスやドヴォルザークの協奏曲を録音しました。Rhilartesというレーベルから発売予定ですので、日本の皆さんにお会い出来る時までに発売されているといいのですが……。

ウィーン音楽院とモーツァルテウムで指揮を学ぶ。1984年にクラーゲンフルトでヨハン・シュトラウスの《ウィーン気質》でデビュー。1991～94年まではストラスブールのライン・オペラの首席指揮者を務める。2002年、ウィーン国立歌劇場に《ルチア》でデビュー。同劇場ではこれまでに《こうもり》、《ノルマ》、《ロベルト・デヴェリュー》、《椿姫》、《ナクソス島のアリアドネ》、《清教徒》を指揮している。10～11月にかけて行われるウィーン国立歌劇場日本公演では《ロベルト・デヴリュー》を指揮する（10月31日、11月4日、8日・東京文化会館）